

# 第4章 虫追い雑学ちびつと 45年間の移り変わり

現在のJAにじ田主丸虫追い祭りも、令和4(2022)年で第16回となりました。この45年間、祭りも変わってきました。どんな風に今の形になったのか。ちびつとちよこつと紹介します。これで令和7(2025)年第17回がより面白くなるはずですよ。

## ■大馬は45年現役選手

手塚・実盛の人形は、顔の面以外は全て新たに作りませんが、大馬はその骨組みを昭和52(1977)年から45年間使い続けています。

大馬は人を乗せる、という第1回からの伝統があります。しかし、大馬を製作した当時田主丸町農協パイオニアクラブ副会長だった今村重徳さんには想定外の出来事でした。

現在は装着されている乗馬時の足かけ部が当時無かったことから、それが分かりました。初の人乗せに今村さんは不安でドキドキでしたが、無事に乗せおせ「壊れんかったねえ」と大いに安堵したそうです。ちなみに今は、保育所の独身の先生が乗ると結婚する、とのジンクスがあるとか。

昭和61(1986)年第4回あたりで、鞍(くら)を支える新しい竹が追加補強されました。同じ時に足かけ部も追加されたと思われま。第5回で足かけ部が確認できます。

▼竹の追加補修(昭和61年頃) 24



変わった改修では、第4回から平成10(1998)年第8回の間で、大馬の口から煙を出す仕掛けが追加されました。不思議にも実際に煙を出すのを見た人はいません。その後も補修したとは言え、さすがに長年の疲れは隠せません。馬の顔はうなだれ、口は右半分がめくれ上がり、左肩が落ちて体がねじれています。

それでも、第1回の担ぎ手達の息づかいを知る大馬です。できるだけ長く現役を続けてもらいたいものです。

## ■川合戦の復活は第3回

昭和39(1964)年以前の地元虫追いで行われていた川合戦ですが、第1回は行われず、昭和58(1983)年第3回に復活しました。

復活の立役者は、当時の田主丸町農協青壮年部長だった石井重敏さん。それまでの町民グラウンドの夜決戦よりも観客を増やせないか、と思索していたところ、指導者役の地元の方から昔の川合戦の話聞き「これだ！」と直感。

石井さんは、農協の古賀峰雄課長を巨瀬川に連れて行き「川合戦をしたい。今から地下足袋で川に入りますから見て下さい」とひざまで浸かって突然のサプライズ提案。そこから川合戦復活が始まりました。

会場を昔のまま中央橋の西側にせず東側としたのも、広い観客スペースと祭りを見下ろせる眺めで、多くの観客を呼び込めると見込んだからです。

川合戦の思い出は「全員が初めてで、眼鏡をベルトで留めるのを忘れて、たくさんの眼鏡が犠牲になったですね」と石井さんは語ります。

会場を竹の柵で囲み松明(たいまつ)を灯す演出は、現在まで引き継がれています。

## ■指揮棒は農協独自の演技

指揮棒とは、踊りの上下動作や合戦を指示する赤白の采配(さいはい)のことですが、それを持つリーダーも意味します。采配は戦場で指揮する道具で、手塚・実盛の両人形も左手に持ちます。

第3回までは指揮棒役はおらず、代わり

▼第3回初の川合戦(昭和58年)。今は無い倉庫が背後に。K



にいたのは昔ながらの「人形裁判」と呼ばれた監督役です。昔の虫追いの経験があり農協若手を指導した地元の方々がその役を務めました。

昭和61(1986)年第4回から農協の青壮年部長と若手パイオニアクラブ会長の2人が監督役になり、指揮棒も登場しました。練習で上下動作を棒で指示したのを本番に採り入れたようです。指揮棒役は人形と一緒にかがんだり立ったりしますが、これも農協若手が編み出した演技です。

## ■人形も今風の顔立ち

2体の人形は物語設定になった『平家物語』に沿って、実盛は老人、手塚は若者に見えます。しかし、その風貌は少しずつ変わってきました。

を鳴らして演技を盛り上げました。

他にも、全会場に説明ナレーターを同行させる、配布用記録ビデオテープを作成する、など広報活動も充実させました。

この第8回の総責任者となった田主丸地区青年部長が、現在のJAにじ右田英訓組合長です。

## ■川合戦にありがちなハプニング

過去の動画を見ると、夜の川合戦で大いに羽目を外す面白場面が結構出てきます。

平成4(1992)年第6回。大馬が尻を振り回し、筑後三本締めする手塚の舞い手を押し倒す。怒った舞い手は大馬の首もとに手塚人形を突き刺す。大馬は再び尻で手塚方を蹴散らす。

平成10(1998)年第8回。実盛が不意に手塚に激突、手塚方の舞い手は手塚人形を実盛方の頭上に倒す。会場を囲む松明(たいまつ)の柵へ両人形が絡んだまま倒れて柵を壊す。疾走する大馬が曲れず尻を柵に接触、担ぎ手数人が挟まれ転倒。

平成16(2004)年第10回。相手方舞い手に突き刺すように人形を水平に寝かせて激突。倒れた人形の真上を走り抜ける大馬だが、担ぎ手が人形につまづき転倒。バランスを失った大馬も川に大転倒。

平成25(2013)年第13回。合戦で実盛に向かおうと構えた手塚人形に大馬が背後から突入、鼻先に手塚を引っ掛ける。

さて、今年第17回の夜の川合戦も何か起こるか。目が離せません。

▼水の祭典久留米まつり(平成19年) 25



第1回の人形は昔の虫追いの伝統を引き継ぎ、実盛は鼻下の口ヒゲとあごヒゲを伸ばしてました。手塚も短めのあごヒゲでした。ヒゲは髪同様に棕櫚(しゅろ)で作られました。髪は両方とも背中の中半ばまである長髪。その風貌は第3回まで続きます。

それが平成元(1989)年第5回にはヒゲが消え、髪もそれ以降次第に短くなり、令和元(2019)年第15回からは両方とも肩までになり、こざつぱりしました。

実盛のあごヒゲは一時期復活したものの、第15回では再び無くなっています。口ヒゲは棕櫚で作らず、顔の面に描くようになりましたが、遠目からは目立ちません。だから、実盛は若返った感じがします。

身体つきは、昭和58(1983)年第3回頃まで、人形の芯棒をそのまま胴体としたので

かなり細身でした。それが第5回には、現在と同じ剣道防具の「胴」を付け始めました。

「よかトピア、水の祭典で演技」

「よかトピア」は、平成元(1989)年にシアターでもち地区で開催された国際博覧会です。開催2日目の3月18日、開会式があったリゾートシアター、および、あいの広場で虫追い祭を披露しました。

参加した現JAにじ右田英訓組合長によれば、竹に垂らす箆旗(むしろぼた)をたくさん作り、そこに農業の宣伝文を書いて、会場に掲げたそうです。

リゾートシアターでは、ミュージカル『HIKIO』の公演前に演技しました。舞台袖で主演の夏木マリを間近に見た参加者もいて、彼女の美しさにとっても驚いたそうです。無事に演技を終えた一行は、片ノ瀬温泉の旅館で盛大に成功を祝いました。

なお、『農協だより』か何かで博覧会出演のカラー記事を見た話もありますが、残念ながらことに当時の写真が全く見つかりません。博覧会には紅乙女酒造も出展、その空間立休映像ビジョンは好評でした。

▼第10回ナイアガラ花火(平成16年) 26



今の祭りの形になったのは、平成10(1998)年第8回の時です。平成8(1996)年にJAにじが設立して初めての虫追い祭りでした。

第1回から使い続けた横断幕が作り替えられ、タイトルも「虫追い祭」から「虫追い祭り」になりました。夜の合戦で、その横断幕を巨瀬川北岸に掲げたのもこの時です。川の南側に新たに設置したひな壇式観客席に見せるためです。観客席の上部には、これも新調した夜合戦専用の横断幕を飾りました。

指揮棒役のハッピーも、それまでの「祭」字を染め抜いた青年部の水色ハッピーから、専用の「虫追い」字の紺色ハッピーに変わりました。

これ以降定番になった最大の演出が、ナイアガラ花火です。今は会場の東西2カ所を点火されますが、当時は会場の東側だけだったようです。午前中に回った各小学校では爆竹